
真夏のスノーマン

82

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真夏のスノーマン

【著者名】

IZUMI

82

【あらすじ】

幼なじみの「佳奈子」と「牧夫」。

気の強い佳奈子といじめられっ子の牧夫は、とある事がきっかけで南の島へ。

いわくつきの島で二人を待ち受けているものとは。

：：：：：：：：：：

「かなぶん！」

急に呼び止められ、私は立ち止った。

振り返ると、校舎から田舎を揺らしながら体格の良い少年が走ってく。

「またいじめられたの？」

体格の良い少年は恥ずかしそうに俯いている。

彼は牧夫^{まきお}。私のクラスメートだ。

「だってあいつらひどいんだぜ。」

あいつらとは恐らく、牧夫をいじめているクラスメートの事だろ？

私は小さい頃から牧夫を知っている。

人一倍体が大きくて臆病な牧夫は格好のいじめの的だった。
どうやら中学校に上がつてもいじめは続いているようだ。

「やり返しなよ。悔しくないの？」

「でも…。」

このやり取りも何度目だろうか。

決まって牧夫はいじめっ子に拳を握り返すことはない。

「あーあ、今まで牧夫のお守りが続くんだろ。」

「…。」

下校の時刻がとっくに過ぎた校庭は、生徒もまばらで閑散としている。

散り終わった桜の木がより一層、校庭を寂しく見せているのかもしれない。

「ほら、帰るよ！」

私はやれやれと言った表情で言った。

「うん。」

表情を明るくした牧夫はそう言つなり、私と横並びの位置で下らない話をしながら楽しそうに歩き出した。

やれやれ、本当にしようがない奴だな。

と、思いながらも、私はついついその下らない話に引き込まれ、いつしか一人で大笑いしていた。

二人仲良く下校する様は小学校の頃から変わらない。

何だからんだ言つても幼なじみ。話が尽きる事は無かつた。

これは私が中学校1年生の話。
とある一日の出来事である。

奈落島編～ハジマリ～（前書き）

僕は牧夫。

中学3年生だ。

中学校に上がりましたのは太っていたこともあり馬鹿にされていたが、1年生の春、バスケットボール部顧問の美樹本先生に声を掛けられた事で人生が大きく変わった。

最初は気が進まなかつた僕も、いかにも山男風のいかつい美樹本先生の執拗な勧誘に負けて入部してしまつたのだ。

だが、あんなに後悔したのは生まれて始めてだつた。

とにかく走れ！

どうやらこれが美樹本先生の持論らしく、ひたすら走らされたのだ。

練習が始まるとランニング、ダッシュ、ランニング、の繰り返し。

始めの頃はボールさえ触らせられなかつた。

たが、そんなキツイ練習を乗り越えられたのは親友からの言葉のおかげだつたと思う。

「やつ返しなよ。悔しくなーの?」

もうダメだと思つた時には必ず、彼女の言葉が頭をよぎつた。

負けるもんかー」と口を奮い立たせ、がむしゃらに頑張りこむと不思議と走るのが苦で無くなつてきた。

体重は落ち、チーム一のスタミナを付けた僕は、今までこのチームでレギュラーとして定着している。

今日はそんな日々が終わろうとかっこひどい。

ペーー!!

ゲームセッタ！龍谷中学校の勝利！！

僕たち3年生は最後の予選で惜しくも破れ、引退することになった。

「せっかくの夏休みだし、みんなでキャンプにでも行こうよ。」

予選に破れ、引退式を終えた僕たちはそんな話で盛り上がっていた。

「やつだなー、でも男だけじゃあ、あまりにも寂しくないか?」

：：：：：：：：：：

「かなぶん！」

急に呼び止められ、私は立ち止った。

振り返ると、校舎から田舎を揺らしながら体格の良い少年が走って
くる。

「またいじめられたの？」

体格の良い少年は恥ずかしそうに俯いている。

彼は牧夫^{まきお}。私のクラスメートだ。

「だってあいつらひどいんだぜ。」

あいつらとは恐らく、牧夫をいじめているクラスメートの事だろう。

私は小さい頃から牧夫を知っている。

人一倍体が大きくて臆病な牧夫は格好のいじめの的だった。
どうやら中学校に上がつてもいじめは続いているようだ。

「やり返しなよ。悔しくないの？」

「でも…。」

このやり取りも何度目だろうか。

決まって牧夫はいじめっ子に拳を握り返すことはない。

「あーあ、今まで牧夫のお守りが続くんだろ。」

「…。」

下校の時刻がとっくに過ぎた校庭は、生徒もまばらで閑散としている。

散り終わった桜の木がより一層、校庭を寂しく見せているのかもしれない。

「ほら、帰るよ！」

私はやれやれと言った表情で言った。

「うん。」

表情を明るくした牧夫はそう言つなり、私と横並びの位置で下らない話をしながら楽しそうに歩き出した。

やれやれ、本当にしようがない奴だな。

と、思いながらも、私はついついその下らない話に引き込まれ、いつしか一人で大笑いしていた。

二人仲良く下校する様は小学校の頃から変わらない。

何だからんだ言つても幼なじみ。話が尽きる事は無かつた。

これは私が中学校1年生の話。
とある一日の出来事である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1450m/>

真夏のスノーマン

2010年10月13日08時20分発行